

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 4 日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04410

研究課題名(和文) 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Development of a clinical psychological curriculum to foster university students' communication skills

研究代表者

山本 文枝 (Yamamoto, Fumie)

安田女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：40369161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：大学生のコミュニケーション能力育成のためのカリキュラム開発において、1年目は大学生対象にコミュニケーションの実態調査および大学教員の発達障がい学生の配慮に関する意識調査を行った。2年目はグループワークを取り入れた演習授業、3年目はペアワークを取り入れた講義型授業や集団討論で検証した。4年目はカリキュラムの汎用性を高めるため、授業のグループディスカッションで活用できるスマートフォンのアプリケーションを作成した。このアプリケーションを効果的にカリキュラムに取り入れる方法について、今後さらに検討する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自閉症スペクトラムに代表される社会性の発達障がいのグレーゾーンにいる大学生は支援につながりにいため、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成する支援を行うことが喫緊な課題である。カリキュラム開発においては、コミュニケーション能力の向上だけでなく自己概念の肯定的変化をねらうなどの二次障害の発症にかかわる問題に配慮する臨床心理学的アプローチをとり入れることが重要であると考えられる。これはまた、発達障がい者のみならず全ての大学生の自尊心や自己肯定感を高め、社会に出ていくための意欲向上や自信の獲得につながるユニバーサルデザインとなる。

研究成果の概要(英文)：For development of a clinical psychological curriculum to foster university students' communication skills, in the first year, we conducted a survey on the actual conditions of communication for university students and an attitude survey on the consideration of students with developmental disabilities. In the 2nd year, we practiced with group work, and in the 3rd year, we conducted a lecture-type class with group work and group discussion. In the 4th year, in order to increase the versatility of the curriculum, we created a smartphone application that can be used in group discussions. We plan to explore further ways to effectively use this application in the curriculum.

研究分野：臨床心理学

キーワード：大学生 コミュニケーション 自閉症スペクトラム 自己概念 カリキュラム開発 グループディスカッション ポジティブフィードバック スマートフォンアプリ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学などの高等教育機関において、発達障がいのある学生が増加している。日本学生支援機構の「大学、短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」によれば、平成 23 年度において発達障がいの学生は在籍する学生全体の 14.2% を占めており、さらに平成 25 年の調査では 17.8% と増加する傾向にある。高等教育機関である大学においても発達障がいのある学生のニーズを取り入れた支援体制の構築及びカリキュラムの構成などの対応が迫られているが、十分とはいえない現状がある。

(2) 大学生において問題となるのは、自閉症スペクトラムに代表されるような社会性の発達障がいである。特に、対人コミュニケーションにおける困り感である。自閉症スペクトラムの考え方は、自閉症と健常者は連続体上に位置する (Baron-Cohen, 1995) というもので、グレーゾーンの人々が社会に存在することを意味する。このグレーゾーンにいる大学生は、学業面では問題なく単位を修得し、クラブやアルバイトなどの活動にかかわらなければ、人間関係において特別な困難に直面することもなく、またサポートを受ける機会を得ないまま学生生活を送ることができる。ところが、就職活動などの社会活動が本格的に始まる大学の出口のところで困難に直面する可能性が高い。大学ではこのような問題に対し、学生相談を主とする対応はなされているが、教育カリキュラムとしての対策が不十分といえる。よって、現在行われている大学教育について、発達障がいの支援の視点から調査を行い、カリキュラムの見直しをはかることが重要である。

(3) 発達障がいにおいては、二次障がいの発症にかかわる問題がある。自閉症スペクトラム傾向のある学生はコミュニケーションに困難さを感じており、自信を喪失している可能性が示唆されている。精神疾患とまではいかなくとも、自尊心あるいは自己肯定感の低下がみられるケースが少なくない (小林, 2015)。よって臨床心理学的観点から、カリキュラムの開発においては発達障がいにおける二次障がいの発症について考慮したものであることが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、自閉症スペクトラム傾向のある大学生の困り感を視点とし、1) 自己概念の肯定的な方向への変化、2) コミュニケーションスキルの向上、3) コミュニケーション行動の変化をねらいとしたカリキュラムの開発を目的とする。まず、調査によって、大学生の自閉症スペクトラム傾向、自己概念、コミュニケーションスキル及び実際の行動、大学生活におけるコミュニケーションに関する経験等の実態と、それらの相互の関連性について検討する。また、支援が必要な大学生に対する大学教員の意識や現在の取り組みについても検討する。これらの調査結果をもとに、上記 1) ~ 3) をねらいとした大学における臨床心理学の視点によるカリキュラムを開発する。

3. 研究の方法

(1) 大学生対象 Web 調査およびインタビュー調査 (2016 年 11 月 ~ 2017 年 2 月)

大学生 978 人を対象に、自閉症スペクトラム指数 (以下、AQ と表記する) 自己概念、コミュニケーションスキル、実際のコミュニケーション行動、大学生活のコミュニケーションに関する経験について Web 調査を行った。調査は 1 カ月おきに継続して 3 回回答してもらった。Web 調査に参加した大学生にインタビュー調査の募集を行い、協力を申し出た大学生 52 人にインタビュー調査を行った。個人情報の保護、中断を申し出てよいなどの倫理的配慮を説明し、調査趣旨に同意した学生が参加した。

(2) 大学教員対象の Web 調査 (2017 年 1 月)

Web 調査会社に会員登録している大学教員 350 人を対象に、学習および大学生活における支援が必要な大学生に対する大学教員の意識や取り組みについて Web 調査を行った。質問内容は、発達障がいの知識の有無、授業や学生生活面で支援や配慮の必要があると思われる学生の存在の有無、具体的に行っている配慮や支援の内容、授業において学生のコミュニケーション能力を向上のための取り組みが必要かどうかと理由 (自由記述)、上記の取り組みは大学教育で現実実施可能と思うかどうかと理由 (自由記述)、取り組んでみたい授業形態であった。

(3) 演習形式の授業におけるグループワークの検討 (2017 年 9 月 ~ 2018 年 1 月)

女子大学生 213 人 (平均年齢 20 歳) を対象に、演習形式の授業にグループワークを実施した。グループワークは、他者理解、自己理解、チームワーク等を目的とした構成的グループエンカウンターを主に参考にして 5 種類を作成した。1 回目「4 つの窓 (2 人ペアで自己紹介する)」、2 回目「セールストーク (2 人ペアでロールプレイ式の会話をする)」、3 回目「3 人でトーク (3 人で提示したテーマについて話し合う)」、4 回目「新聞紙でレターづくり (4 人で目的にもとづいた作業を行う)」、5 回目「私の四面鏡 (5 ~ 6 人でお互いの印象について伝えあう)」を合計 5 回実施した。1 回目から 5 回目にかけて徐々にグループの人数を 2 人から 5 人に増やした。グループワーク実施後に毎回「ふりかえりシート」に自己評価および感想を記入してもらった。また実施前

後には、AQ、自己概念、コミュニケーションスキル、自己肯定感について質問紙調査を行った。個人情報の保護や中断を申し出ることも可能であるなどの倫理的配慮を説明し、同意した学生が回答に協力した。

(4) 講義形式の授業におけるペアワークの検討 (2018年9月~2019年1月)

女子大学生227人(平均年齢20歳)を対象に、講義形式の授業にペアワークを実施した。ペアワークの方法は、アクティブ・ラーニングの「シンクペアシェア」からペア活動のみを抽出し「シンクペア」として実施した。シンクペアの後にペアの学生同士で相手の良かったところをお互いに伝え合うグループ(ポジティブフィードバックあり)、シンクペアのみ実施するグループ(ポジティブフィードバックなし)、何もしないグループで比較検討をした。話し合いのテーマは、教員が講義内容に関連して設定した。実施前後には、AQ、自己概念、コミュニケーションスキル、自己肯定感について質問紙調査を行った。個人情報の保護や中断を申し出ることも可能などの倫理的配慮を説明し、同意した学生が回答に協力した。

(5) 集団討論後のフィードバックの検討 (2019年3月)

女子大学生39人(平均年齢21歳)を対象に、7~8名ずつランダムに5つの集団に割り当て、15分間の集団討論を週1回連続3週間、合計3回実施した。討論後に行うフィードバックは、集団ごとに次のように設定した。教師によるポジティブフィードバック(話し合い行動においてその学生の良かったところを伝える)を行う集団、教師によるポジティブフィードバックと課題フィードバック(話し合い行動についてその学生の課題を伝える)の両方を行う集団、討論のみでフィードバックを行わない集団、学生相互のポジティブフィードバックを行う集団、学生相互のポジティブフィードバックと課題フィードバックの両方を行う集団であった。実施前後には、AQ、自己概念、コミュニケーションスキル、自己肯定感の変化について質問紙調査を行った。個人情報の保護や中断を申し出ることも可能などの倫理的配慮を説明し、同意した学生が回答に協力した。

(6) 「話し合い」活動を支援するアプリケーションの作成 (2019年9月~2020年3月)

コミュニケーション能力を授業の中で高めていくためのカリキュラムの汎用性を高め広く実践可能なものにするを目的とし、上記(1)~(5)の方法で検討した結果をふまえ、教育学系以外の教員でも授業に取り入れやすい方法について検討した。具体的には、授業場面で教員および学生がグループディスカッションなどのコミュニケーション場面で使用できるツールとしてスマートフォンで使用するアプリケーションの作成についてプログラミングの専門家とともに開発を進めた。

4. 研究成果

(1) 大学生対象 Web 調査の結果、AQ と自己概念における「社交性」因子および「やさしさ」因子との間に負の相関がみられ、一方で「非主張性」因子および「非行動力」因子においては正の相関がみられた。このことは、AQ が高い大学生すなわち自閉症スペクトラム傾向のある学生は、自己概念において、社交性がなく、自分の意見を言えない、行動的ではないという消極的な自己イメージがあることが示唆された。また、重回帰分析により、「非主張性」因子には、AQ の下位因子である「注意の切り替えの困難さ」が特に影響を与えていることが示唆された。

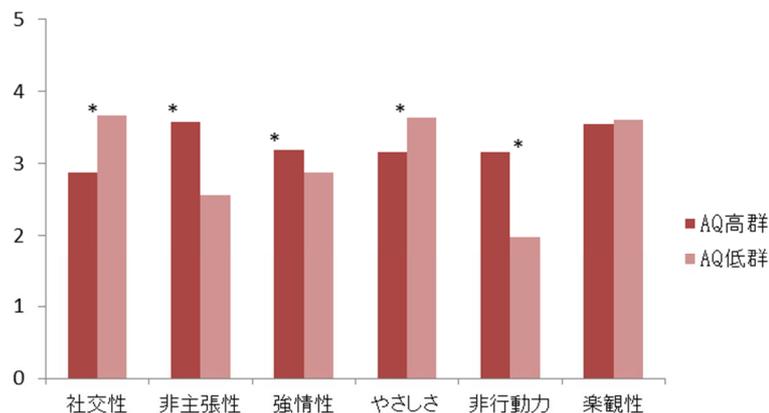


図1 AQ高群(39人)とAQ低群(39人)の自己概念の平均得点。
*は有意差があった自己概念。

(2) 大学教員対象 Web 調査の結果、発達障がいの自閉症スペクトラム (ASD) の知識の程度が学習障がいや注意欠如 / 多動症に比べ低く、ASD は他の発達障がいに比べ理解が進んでいないことが推察された。また、ASD の知識のある教員の方が、支援が必要な学生の存在に気づいており、また実際の配慮や支援の取り組みを多く行っていた。ASD の知識の程度によって、学生への配慮やコミュニケーションスキル向上の取り組みの授業における必要性への意識、取り組みの現実的可能性に対する意識、実際に行っている配慮に違いがみられた。このことは、障がいに対する知識と教員の意識や行動には関連があることが示唆しており、カリキュラム開発においては、大学教員に対して ASD の正しい知識および必要な配慮内容の情報提供を併せて行うことが重要であると考えられる。また、学生のコミュニケーションスキル向上のために今後取り組んでみたい内容について、「担当科目の指導方法の一部に取り入れる」や「授業形態を変化させて取り入れる」という回答の選択が全体において多かった。また、ASD の知識がある教員はそうでない教員に比べて、授業に積極的に取り入れることに対する前向きな回答がみられた。

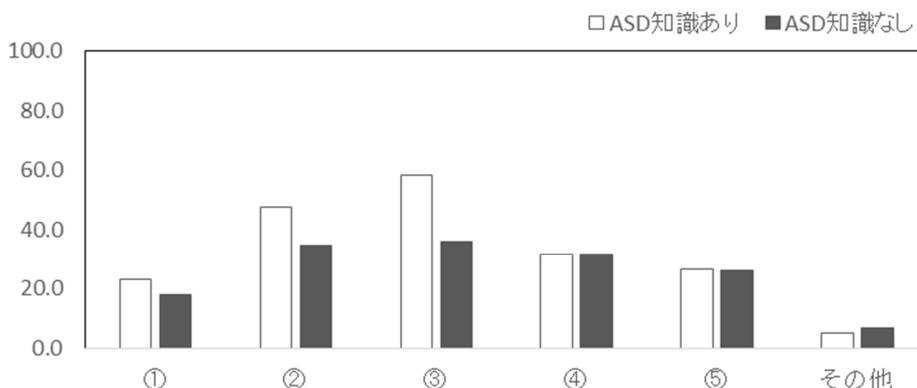


図2 ASD知識あり・なし群における授業の中でコミュニケーション能力を育成するために取り組んでみたい内容(複数回答可)(%)

- あらかじめ構成されたコミュニケーション育成のためのカリキュラムの実施する
- 担当科目の指導方法の一部に取り入れる(例えば、教員と学生の相互コミュニケーションの中で)
- 担当科目の授業形態を変化させて取り入れる(例えば、学生の話し合いの場面をつくる)
- 科目の事前事後学習において取り入れる(例えばグループ学習、コミュニケーションが必要とされる課題を出すなど)
- 授業時間外の個別指導

(3) 演習形式の授業におけるグループワークの検討を行った結果、教育学部系大学生においては、全体として、実施前よりも実施後の方が自己概念の「明るい」の得点が有意に高くなっていった。さらに「明るい」の得点の変化量(実施後の得点から実施前の得点を引いたもの)とAQに有意な正の相関がみられたことから、コミュニケーションに困難さがあるほど「明るい」という自己概念に肯定的変化に影響を与えた可能性が考えられた。中でもAQの下位因子である「社会的スキルの不足」と「注意の切り替えの困難さ」との間に関連がみられた。心理学部系大学生においては、自己肯定感の自己受容得点が高くなり、自己閉鎖・人間不信得点が低くなっていた。また、AQ指数との関連で実施前後のコミュニケーションスキル得点の変化量との相関分析において、コミュニケーションスキルの自己統制と自己主張に弱い有意な正の相関がみられた一方で、自己概念の「くよくよする」、自己肯定感の「閉鎖性・人間不信」においても弱い有意な正の相関がみられた。カリキュラムにおいて、コミュニケーションスキル向上だけでなく、自己概念の肯定的変化をねらうためには、集団構成員の状況にも配慮し、従来のグループワークの実施方法に加えてルールを追加が必要であることが示唆された。

(4) 講義形式の授業におけるペアワークの検討を行った結果、発達障がいの傾向のある大学生は、「シンクペア」(ペアワーク)を行うだけではなく、その際にポジティブフィードバックをペアの相手から受けることがより重要な要素であることが明らかとなった。ポジティブフィードバックを取り入れたグループでは、AQが高いほどコミュニケーションスキルの「他者受容」が

より高まっていたことや、自己肯定感の「自己閉鎖性」が低くなっていた。このことから、ポジティブフィードバックを受けることによって、コミュニケーションにおいて相手から安心感を与えられ、より相手に対して心を開いていく行動へと変化した可能性が考えられる。また、発達障がいのある傾向がある場合、表情から相手の意図や気持ちを読み取ることが困難な可能性があることから、具体的な言葉でフィードバックを受けることは、肯定的変化に有効的に影響した可能性がある。今後は、どのようなポジティブフィードバックがより肯定的な自己概念の変化を生むのか、また行動を肯定的に変化させるのか、ポジティブフィードバックの効果の要素や効果的な与え方について検討する。

(5) 集団討論後のフィードバックの検討を行った結果、AQ と自己概念「ぎこちない」の得点の変化量(実施後の得点から実施前の得点を引いたもの)との間に正の相関傾向がみられた。また、「内気」「おとなしい」とAQの相関は実施後の方がより強くなっていた。このことから集団討論場面においてAQの高い学生ほど参加が困難な自己イメージに直面したことが推測された。また、フィードバック条件ごとでAQが高い学生と低い学生とで比較したところ、ポジティブな自己概念においてAQの高い学生の方がよりフィードバックの影響を受けやすいことが示唆された。今後は、集団メンバーの構成による影響も考慮に入れつつ、フィードバックの方法と肯定的変化への効果について引き続き検討を行うこととする。

(6) 授業における学生同士の「話し合い」活動を支援するアプリケーション「会話に花を咲かせよう」を作成した。授業等で学生同士の「話し合い」活動する際に、学生らが自分のスマートフォンで使用できるものである。作成においては、これまでの研究成果をもとに次の要件を設けた。コミュニケーションの楽しさを体験できること、自信や自己肯定感を高めるなどの心理的効果をねらうこと、自閉症スペクトラムのコミュニケーションにおける困難さに配慮した機能があること、多くの学生の普段の行動と違和感や抵抗感が少ない方法であること、多様な授業形態で実施できる汎用性があること、なるべく教員の力量に影響されない方法であることであった。においては、話し合いに参加したメンバーの会話への満足度によって画面上で花が咲くというゲーム性を取り入れ、楽しさやメンバーとの一体感を共有できるように設定した。

については、話し合い終了後に、メンバー相互にポジティブフィードバックを送りあう機能を設けた。については、話し合うという目に見えない状況をできるだけ視覚化することを試みた。例えば、話した時間の経過を棒グラフで示すなどの視覚的補助機能を設けた。また、話し合いを始める前の準備の段階において、自分の意見を整理する時間や司会やタイムキーパーといった役割を決める時間など、話し合うための一連の行動を構造化し順序立てて実施できるようなプログラミングとした。さらに、自分の意見をメモする機能や書いたメモを必要であればアプリが読み上げる機能、メモをメンバー同士で共有できるフリップ機能も設けた。については、学生が日常的に使用しているスマートフォンで使用できるアプリケーションとした。においては、使用する授業によって、話し合いの時間やテーマ、グループのメンバー数などをフレキシブルに設定できるものとした。については、話し合う行動をする時のポイントを、アプリケーションがタイミングに応じて(プログラムの条件設定をしている)メッセージを学生に発信するように設定した。

以上のように、授業で話し合いを効果的に取り入れる際の学生への“おたすけアプリケーション”として作成した。このアプリケーションを授業に取り入れた際の効果と課題は、新型コロナウイルス感染症防止のための社会状況から、大学内でのグループディスカッションの取り組みの自粛要請もあり実施が困難であった。よって引き続き検証を行い、問題点を改善し、汎用性のあるものにしていく取り組みを行う。

今後さらに、大学生のコミュニケーション能力育成のための大学における授業のカリキュラムの開発について、アプリケーションをどのように授業に効果的に取り入れていくかを含め、引き続き研究を行う予定である。

<引用文献>

- [1] 独立行政法人日本学生支援機構(2014). 平成25年度(2013年度)大学,短期大学及び高等専門学校における障がいのある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
- [2] Baron-Cohen, S.(1995). Mindblindness: an essay on autism and theory of mind. Boston: MIT Press-Broadford Books.
- [3] 小林 真(2015). 発達障がいのある青年への支援に関する諸問題. 教育心理学年報, 54, 102-118.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西まゆみ, 西川ひろ子, 山本文枝, 藤田依久子, 高城佳那, 西川京子, 船津守久	4. 巻 28
2. 論文標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発 - 教育系学部の学生を対象としたグループワークの試行的実施による検討 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 児童教育研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本文枝, 西まゆみ, 藤沢敏幸, 船津守久	4. 巻 23
2. 論文標題 大学教員の授業及び学生生活において支援が必要な大学生に対する意識と取り組みに関する調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 安田女子大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 127-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本文枝・西川ひろ子・西まゆみ・藤田依久子・高城佳那・西川京子・佐藤寛子・船津守久	4. 巻 29
2. 論文標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発 - 教育系学部所属の学生への「シンクペア」の効果検討 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 児童教育研究	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西まゆみ, 西川ひろ子, 山本文枝, 藤田依久子, 高城佳那, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発 (6) - グループワークの試行的実施による検討 -
3. 学会等名 児童教育学会第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本文枝, 西川ひろ子, 西まゆみ, 藤田依久子, 高城佳那, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(7) - グループワークの試行的実施による検討 -
3. 学会等名 児童教育学会第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本文枝, 西まゆみ, 藤田依久子, 高城佳那, 藤沢敏幸, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(5) - グループワークの試行的実施による検討 -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本文枝, 西まゆみ, 藤沢敏幸, 船津守久, 藤田依久子, 西川ひろ子, 西川京子, 高城佳那
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(8) グループワークの試行的実施による検討 その2
3. 学会等名 中国四国心理学会第74回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本文枝, 西まゆみ, 藤沢敏幸, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(1) - 自閉症スペクトラム指数と自己概念との関連 -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本文枝, 西まゆみ, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(2) 大学教員の授業および学生生活において支援が必要な大学生に対する意識や取り組みに関する調査
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本文枝, 西まゆみ, 藤沢敏幸, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(3) 大学生のWeb調査からみる大学生活におけるコミュニケーションに関する経験と自己概念との関連
3. 学会等名 中国四国心理学会第73回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西まゆみ, 山本文枝, 藤沢敏幸, 船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(4) 大学生のインタビュー調査からみる大学生活におけるコミュニケーションに関する経験と自己概念との関連
3. 学会等名 中国四国心理学会第73回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本文枝・西川ひろ子・西まゆみ・藤田依久子・西川京子・高城佳那・佐藤寛子・船津守久
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(9) - シンクペアの検討 -
3. 学会等名 児童教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本文枝・西まゆみ・藤沢敏幸・船津守久・藤田依久子・西川ひろ子・西川京子・高城佳那
2. 発表標題 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(10) - 講義にとりいれたシンクペアの検討 -
3. 学会等名 中国四国心理学会第75回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	船津 守久 (YAMAMOTO Fumie) (40117049)	安田女子大学・心理学部・教授 (35408)	
研究分担者	後藤 まゆみ(西まゆみ) (NISHI Mayumi) (60218104)	安田女子大学・心理学部・准教授 (35408)	
研究分担者	藤沢 敏幸 (FUJISAWA Toshiyuki) (70351997)	安田女子大学・心理学部・教授 (35408)	
研究分担者	藤田 依久子 (FUJITA Ikuko) (40571972)	安田女子大学・心理学部・准教授 (35408)	
研究分担者	西川 京子 (NISHIKAWA Kyoko) (70517028)	福山平成大学・福祉健康学部・准教授 (35411)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	西川 宏子 (西川ひろ子) (NISHIKAWA Hiroko) (00284133)	安田女子大学・教育学部・准教授 (35408)	
研究 分 担 者	高城 佳那 (TAKAGI Kana) (00759590)	静岡産業大学・経営学部・講師 (33805)	